

本協会の活動報告

●ワークショップ

「木曾馬の教育、福祉、医療への活用を図る」

「木曾馬」がもつ特性を、教育、福祉、医療等に活用できる貴重な社会的財産資源として捉え、その可能性を探るためのワークショップが、平成21年11月23日に木曾町（長野県）主催で行われました。これに本協会からは普及活動の一環として滝坂、川嶋、深野の3名を派遣いたしました。

当日は、雪をかぶった御岳山の絶景が望める快晴に恵まれ、会場となった『開田高原振興公社「木曾馬の里」』には木曾地域の養護学校、福祉関連施設のスタッフ計28名が集まりました。

人対人・人対馬の関係づくりや、介助する・されるの理解などをポイントにプログラムは進められ、「見る」、「声かけ」、「接近」、「ふれる」、「ブラッシング」といった人馬の関係づくりで重要となる一連の動作を、初対面の人に対してやってみるというのは、当初違和感を覚えた参加者が多いようでした。しかしながら、相手から体をさわってもらうことで徐々に心をゆるし、関係が成立することの手ごたえを感じたようで、最終的には目をつぶり、言葉を交わさなくても相手のブラッシング動作に体を合わせられることを実感できた様子でした。

自分で食べるのと、食べさせてもらうのとでの味覚の違いに新鮮な驚き



を感じた食事介助体験を含む昼食後は、実際に木曾馬を用いて一緒に歩く、ひき馬をする、乗るなどの活動を行いました。今回用いた馬たちは普段から木曾養護学校での活動等にも使用されることもあり、非常に穏やかな性格の持ち主で、歩調もゆったりとしていたことからスムーズにプログラムを進めることができました。また騎乗者を介助するのに程よい体高と横幅には、木曾馬が今後この領域で活躍を拓いていくのに十分な素質を持っていることが感じとれました。この地域での今後の展開が非常に楽しみなワークショップでした。（深野 聡）



会員募集のお知らせ

NPO法人日本治療的乗馬協会では、会員を募集しております。会員の皆様には定期的に発行されるニュースレターをお届けし、治療的乗馬に関する最新情報をお伝えしています。入会を希望される方は、NPO法人日本治療的乗馬協会事務局03-3565-6641までお問い合わせください。また当NPOの活動についての最新情報につきましては、当協会ホームページ <http://jtranet.jp/> をご覧ください。

情報の募集

団体等の活動報告やお知らせをニュースレターに掲載しております。掲載を希望される情報等は事務局までお寄せください。

（編集後記）ニュースレター第6号をお届けいたします。今回で第6回となります研究集会の開催について皆様に御案内できることとなりました。今年は参加費を低く設定し、あわせて懇親会費を参加費に含めることにいたしました。各地から皆さまの昨年以上の参加をお待ちしております。NPOの事務局も下記に移転しました。ニュースレターの編集には今号より深野が加わり2名体制となりました。より充実した紙面を作成していきたいと思えます。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。（川嶋）

日本治療的乗馬協会 ニュースレター 第6号

編集・発行 特定非営利活動法人日本治療的乗馬協会

発行日 2010(平成22)年7月15日

事務局 東京都新宿区西落合2丁目6番6号

電話：03-3565-6641

E-mail：office@jtranet.jp

ホームページ <http://jtranet.jp/>



JTRA News Letter

日本治療的乗馬協会ニュースレター

第6号

発行日
2010年7月15日

第6回「治療的乗馬」研究集会 開催のご案内

今年度の「治療的乗馬」研究集会を、「クライアントのニーズと活動プログラムの設計」というテーマで、開催いたします。

これまで、人のことについて（心理的な側面からおよび身体的な側面から）、馬のことについてを大会テーマに研究集会を行いました。今回はクライアントのニーズについて考え、適切な活動プログラムの設計について考える機会を持ちたいと思います。

なお、参加費及び懇親会費の設定を次のように改めました。各地から皆様のご参加をお待ち申し上げます。

日時：2010年11月6日(土)・7日(日)

場所：国立オリンピック記念青少年総合センター(東京都渋谷区代々木神園町3-1)

大会テーマ：クライアントのニーズと活動プログラムの設計

趣旨：クライアントのニーズを理解し、適切な活動プログラムを設計するためにはどのようにしたらよいかについて協議する。

内容：○実践および研究報告と協議 ○記念講演

○記念講演

6日(土) 演題「ICF(国際生活機能分類)と治療的乗馬」

伊藤尚志(長野県伊那養護学校・教諭)

7日(日) 演題「『発達障害』概念と子どもへの支援」

落合俊郎(広島大学教育学研究科・教授)

参加費：(2日間参加) 会員 5,000円 一般 7,000円 学生 3,000円

(1日間参加) 会員 3,000円 一般 4,000円 学生 2,000円

※ 6日(土)夜実施予定の懇親会費は参加費に含まれます。

参加方法：参加を希望される方は、参加申込書を日本治療的乗馬協会ホームページ

<http://jtranet.jp/> よりダウンロードの上、申込書内に示されている宛先にFAXにてお申し込みください。(2010年7月30日より受け付けます)

※ 事前登録のない当日参加は参加費が1,000円加算されます。

※ 事前登録のない当日参加は参加費が1,000円加算されます。

演題登録：集会において、発表を希望される組織及び個人は、上記の参加登録後、9月20日までに研究集会事務局まで演題の登録をお願いいたします。

※ 研究集会に関する詳細は日本治療的乗馬協会ホームページ内に掲載いたします。日本治療的乗馬協会ホームページは <http://jtranet.jp/> をご覧ください。

★お問い合わせ先：

第6回「治療的乗馬」研究集会事務局 樋川 office@jtranet.jp まで、メールにてお問い合わせください

国際障害者乗馬連盟(Federation of Riding For The Disabled International)の 名称変更と私たちの組織

国際障害者乗馬連盟は、かねてからの課題であった組織名称変更についての決定を6月のニューズレターで発表しました。新名称は「教育・治療における馬に関する国際連盟(The Federation of Horses in Education and Therapy International)」(仮訳)で、これに伴いロゴマークも右下のように変わることになりました。決定に際して行われた議論の過程は示されていませんが、去る1月のニューズレターにおいて、

「障害者(the disabled)」という表現がもはや時代の通念にそぐわないこと、また「治療的乗馬(therapeutic riding)」という表現がこの領域の活動全体を包括していないことの2点から名称を変えたいとの意向と、新名称についてのアイディア募集がなされてきました。FRDIは国際非営利組織を承認する唯一の国であるベルギーにおいて承認を得ている組織であることから、今後、ベルギーにおける手続きを経て正式に名称変更されることとなります。

さて、私たちのNPOの名称は、「日本治療的乗馬協会(Japan Therapeutic Riding Association)」です。本NPOはFRDIの正会員であり、今回の転換をどのように理解し対応するかについて、現在の考え方をご説明したいと思います。

1. 「障害」概念について

もとより、「障害」は相対的なものであり、社会的概念です。かつて「障害」は医療的な治療的観点もしくは個人の能力の欠如であるという観点で捉えられていました。しかし、国際連合なかでも国際保健機構(WHO)を中心とした約20年にわたる長い国際的な検討を通じて、私たちの社会は、現在「障害」は社会的な認識によって作り出されたものだという認識に立とうとしています。すなわち、「障害」を本人の要因に還元せず、社会の認識や環境条件によって生じている相対的な困難であると考えます。その考え方と具体的な内容は、2001年、WHO総会において「国際生活機能分類(International Classification of Functioning, Disability and Health)」として示され採択

されました。

2. 「治療的乗馬」という表現について

この表現は検討を要する内容が二つ含まれています。

一つは、「治療」ということばです。これは、「therapeutic」ということばの和訳です。現在の国際的通念によれば、人間の健康や福祉、教育、医療に関する専門家による目的に沿って行われる動物を介在させた意図的な介入を「動物介在療法(Animal Assisted Therapy)」と呼びます(Delta societyの定義をもとに)。ここからもわかるように「therapy」は医療のみならず、人間の健康・福祉・教育等の領域を含んでいることがわかります。しかし、日本においては「therapy=医療」ととらえる傾向があります。他方、「セラピー=結果として医療的効果を含む一般活動」といったとらえ方が流通し、安易に「セラピー」ということばが使われている実態もあります。

二つ目は「乗馬」ということばです。これは文字通り「馬に乗る」ことを意味し、馬をパートナーとする障害のある人々を対象として行われている活動の一部しか表していないことばであることは確かです。なぜなら、手入れ、厩務作業、馬の管理等はプログラムを構成する非常に重要な活動内容だからです。

以上のことから、私たちの組織も領域をより適切に示す表現を模索し、それが見つかったとき、名称を変更することになるでしょう。しかし、それまでの間はこれまでの名称を使用していくことにしたいと思います。

趣旨をご理解の上、ご意見をお寄せいただきますようお願い申し上げます。

(滝坂信一)



馬の視野

馬は、うっとりするくらい大きな眼を持っています。直径はおよそ4.5センチで人の眼球の2倍、陸上にすむ哺乳動物のなかでは最大の部類に属します。モグラの眼球は小さくトンボは大きいなど、感覚器官の大きさは、動物がその感覚器官に頼っている度合いをある程度反映しています。その点で、馬は視覚の動物とすることもできます。

さて、真っ正面から見ると、馬はかなり愛嬌のある顔をしています。ただしなんとなく間が抜けている感はいなめません。

正面から見た顔が間が抜けて見える理由のひとつに、眼

の位置があげられます。両眼の間隔は相当ひらいており、ほとんど頭部の真横に眼がついているといってもよいほどです。馬の瞳孔は横長に開いていますが、その瞳孔の形状と眼球の位置により、馬はパノラマ的に世界を見ることができます。彼らの視野は実に350度にもおよびます。またその広い視野の限界に向かって動く物体に対して特に鋭敏なしくみになっています。

両眼がこのような位置にあることは、野生で生き抜くためには重要な要素でした。馬は、広い視野と、視野の端で動くものに敏感なおかげで、背後から忍び足で近づいてくる肉食獣をいち早く察知し、逃げのびることができたのです。

もちろん、こうした特徴を現代の馬たちも受け継いでいます。たとえば、後ろで急に人が動いたり、鳥が飛んだりすると馬は思わぬ反応を示すことがあります。馬を扱う場合には、こうした点を充分注意する必要がありますでしょう。

馬の色覚

太陽光をプリズムを通して分解すると波長の長い順に、赤、橙、黄、緑、青、藍、紫と七色の色が並びます。人はこれらの色を明確に識別して見ることができます。ただし哺乳動物で我々のようにくつきりと色を識別できるのは、人を含めた霊長類ぐらいで、他の多くの動物たちは、もっと淡い色の世界に住んでいると考えられています。

馬に関しては、かつては色を全く感じるできなかったと考えられていました。しかし馬の眼の網膜にある視細胞の形態学的な研究や、馬の学習能力を利用した検査などから、馬はある程度は色を感じる能力があることがわかってきています。

動物の眼の網膜には、桿体と錐体という形の異なる2種類の視細胞が存在します。このうち錐体は色を感じるができる細胞であることがわかっています。馬の網膜にもこの細胞が存在することから、彼らが色覚を有することが推定されます。

また、特定の色が塗られたカードと、明るさの同じ灰色のカードとを判別させる実験をしたところ、馬は黄色を最もよく区別でき、次いで識別が良好なのは緑であることがわかりました。一方、青、赤の識別を馬はまちがえることが多いようです。

これらのことから、馬は色を感じることは可能ですが、その色覚域は黄色を中心に、人より狭い範囲に限定されていると推測できます。

すなわち、きれいなお花畑も、馬の眼には人の目に映るほどにカラフルには見えていないというわけです。

馬の聴覚

馬の耳に念仏などと言われますが、馬の耳は節穴どころか、人と同様すぐれた聴覚を持っています。また、音で距離をかなり正確に判断することができ、人の耳では聞けない超音波も、ある程度は聞き取ることができます。

音は空気の振動として伝わります。1秒あたりの振動数

(周波数。単位はヘルツ)が少なければ低い音、振動数が多ければ高い音に聞こえます。ただし、聞きとることのできる音の周波数の範囲(可聴域)は、動物によって異なります。

たとえば人の可聴域は16ヘルツから2万ヘルツの範囲で、その範囲を越える音は超音波と呼ばれます。馬は、高音に関しては人の可聴域を超える3万ヘルツのいわゆる超音波まで聞くことができます。一方、低い周波数帯での聴力は、人に比べると馬のほうが劣っています。すなわち、馬が聞いている音の範囲は、全体として人よりやや高音域にずれているとすることができます。

もともと、多くの哺乳動物の可聴域の上限は、人を上回っています。たとえばネズミは4万ヘルツ、ネコは5万ヘルツ、イヌは8万ヘルツの音まで聞き取ることができます。イヌの訓練に使う犬笛は2万ヘルツ前後の音ができるように設計されています。犬笛の音は人にはやっとな聞こえる程度ですが、イヌには良く聞こえています。

一方、低音に強いのはゾウです。ゾウは人には聞き取ることのできない超低周波数の音で、遠く離れた群れ同士で交信をしているそうです。

こうして動物界全体を見渡すと、可聴域に関する限り、馬は比較的人間と同じ様な音の世界で生活しているといえるでしょう。

音の識別と記憶

馬は音と結びつけてものごとをおぼえる能力に長けています。

部外者が名前を呼びかけても知らんぷりをしているのに、普段からその馬と交流のある人が呼ぶとすぐに振り向いた、といった経験をしたことのある人もいかもしれません。これは、馬が見知らぬ人をばかにしているからではありません。声の質を聞き分けて反応しているのです。同じ馬と長くつきあい、会ったときにはよく愛撫をして声をかけるように努めれば、馬はやがてあなたの呼びかけにも反応をしてくれるようになります。

また、こうした「音の記憶」は、かなり長期間保持されているようです。

筆者はかつて、引退して数年を経ているオープン馬で、現在は乗馬として飼われている馬と、外国から乗用馬として購入された全く競馬の経験をもたない馬に、競馬のファンファーレを聞かせたことがあります。馬の、音に対する認知能力と記憶力の良さを示そうとしたわけです。

競馬経験のない乗馬は、案の定ファンファーレを聞かせても全く無反応でした。心拍数を同時に記録していましたが、ファンファーレを聞かせても、心拍数には変化は認められませんでした。

ところが、競馬の経験が豊富なかったのオープン馬の心拍数は、ファンファーレに反応してみるみる上昇しました。ファンファーレによって、数年前の現役競走馬時代の記憶がよみがえり反応したものと思われます。

特別寄稿

馬の視覚と聴覚

楠瀬 良(JRA競走馬総合研究所)

馬は人と同じ哺乳動物ですが、体の構造はもちろんのこと、感覚機能も異なっています。すなわち、馬は人とは別の感覚世界に住んでいると言っても過言ではないかもしれないのです。ここでは、馬とつきあうときに参考となる基礎知識として、馬の視覚と聴覚の特徴について述べたいと思います。